



食事作りは町さん(右)と矢野さん(中央)の役目。「いい奥さんになるよ」と、大井さん(左)が笑わせる

ブレイクの丘

走り終えていこう

4

「オアシスファーム」には毎年夏、テレビなどでこの牧場を知った全国の若者たちが、実習と称して牧場生活を体験に訪れる。そのうち何人かは長期滞在を希望するが、大井さんは一度帰し、文通をして若者の人柄や熱意を推し量る。町さんと矢野さんは、大井さんの目になかったギョルだ。

町さんは静岡県出身。テレビ番組でこの牧場を知り、昭和六十一年の夏に牧場を訪れ、四日間の「実習」を体験。翌年一月、六年間勤めたOA機器会社を辞めて、本格的な牧場生活に飛び込んだ。

「親が反対するのは分かってたから、牧場との話も内証で進めて、会社に辞表を出してから初めて打ち会った」

矢野さんも、親に内証で牧場生活を決めた一人。福岡県出身。専門学校生時代の夏休みに三週間、実習を経験し、二年後の昨年八月、一年間の約束でやってきた。

「学校を出てペットショップに一年間勤めたけど、売り物じゃない動物に囲まれた生活がしたかった」。

「たぶん一年じゃ帰らない」と、

反対押し切り牧場へ

二人は七・五畳の個室で生活している。給料は食事代込みで月三万円。化粧やスカートとは無縁の日々だ。決まった休日はない。OL時代が懐かしくなることはあるが、矢野さんは動物をかわいがっているうちに、一日が終わるなんて、やっぱり理想的な生活です」と話す。

町さんは、今年二十日で約束の二年間が終わる。「帰りたいくないけど、親から早く帰って来なさい」と何度も手紙が来るから」と名残惜しそう。

「二年間の牧場生活で、静岡とは別のもう一つのふるさとができたような気がします」

馬の魅力を尋ねたら、矢野さんが「においです。かいでみて下さい」。馬の首に顔を近づけると、若草の香りがした。

〔文・松浦 真一記者〕
〔写真・河野 正敏記者〕

オアシスファーム
登別市富浦の太平洋を見下ろせる丘にある。経営者で場長の大井昭子さん(左)と、町みどりさん(右)、矢野千香子さん(三)の女性三人が、引退した競走馬の世話をしている。馬はサラブレッドとアラブ合わせて十三頭。老馬が大井だ。